

会員紹介： 砂川 眞さん

私の略歴



1939年、大阪生まれの大阪育ち。高校を卒業して東京にいた兄の影響もあり、当然のように大学から東京へ。東京でも更に「外へ」という気持ちが強く、外国への憧れは非常に強かった。慶應大学ではワグネル男声合唱団に入り、男声合唱に熱を入れ、また、キリスト教会の聖歌隊でも4年間歌った。1964年、大学卒業後、恩師の「官に行け」という言葉もあって日本輸出入銀行（輸銀）（現在の国際協力銀行）に就職。この年は東京オリンピックの開催、IMF8条国への移行、OECDへの加盟等で、日本中に国際化ムードが蔓延していたので、入行前から興味津々。入行後、1967-68年にフルブライト奨学金を得てカリフォルニア州のClaremont Graduate Schoolにおいて国際関係論で修士号を取得。輸銀在籍中の1973-78年にアジア開発銀行（ADB）に出向。1995年に輸銀を退職後、米州開発銀行（IDB）で民間局長、（株）日商岩井総合研究所、国際協力機構（JICA）国総研、（株）コーエイ総合研究所などでの調査・研究、国際教養大学、モンゴル国立大学での教職を含め、一貫して開発金融の道を歩む。現在は、自ら設立したコンサルタント会社 Sunagawa & Associates の代表。

従事した仕事の内容

日本輸出入銀行に就職 【1964～1995】

輸銀では主として3つの分野を経験させていただきました。1つは若い頃に調査部、審査部に配属され経済調査、企業審査、プロジェクト分析等の金融の基礎知識をじっくり教わりました。2つ目は米国留学をきっかけに海外勤務が多かったことです（ADBへの出向、メキシコ駐在員、ワシントン駐在員）。3番目は業務では専ら外国向け借款業務に従事したことです。当時の輸銀の主たる業務であった輸出金融、資源金融等は一切経験しませんでした。

輸銀時代を通じていつも頭の中に二つの課題がありました。1つは政府が行う政策金融はどうあるべきか。輸銀は戦後間もない1950年に開発銀行と共に設立されました。その業務目的は輸銀法で明らかで、十分にわかっているつもりでしたが、この課題がいつも頭の片隅にありました。何故なら欧米諸国には類似の政府金融機関が非常に少なく、むしろその存在を否定する意見が強かったからです。輸銀の模範となった米輸銀も付託された業務は限定的で、なおかつ組織自体が時限法で設立されており、その業務はさほど重要視されていなかったように思えたからです。因みに「政策金融の是非」は開発の

世界でも大きな問題で、1993年に発刊された世銀の「東アジアの奇跡」は、かねがね世銀と日本大蔵省との間で長らく見解が分かれていた「特定産業への政策金融の是非」について8か国での実証研究の成果報告書であったと承知しています。(そしてその結論は「国によって相違するが政策金融の効果はみられる」という両者いずれにも理があったという中立的なものであったと理解しています)。

もう1つは相手国政府へ直接融資する際のリスクのことです。輸銀の輸出金融は当初日本の輸出者に融資するという、所謂サプライヤーズクレジット(S/C)から始まりましたが、大規模の設備輸出になると輸入国側へ直接融資してくれとの要請が強くなってきて、所謂バイヤーズクレジット(B/C)に踏み込むことになったわけです。この直接借款は輸出金融だけに止まらず、開発輸入金融にも漸次適用され、ついには世銀との協調融資であるとはいえ、構造改善融資という財政支援にも適用されるようになりました。

アジア開発銀行へ出向 【1973～1978】

ADB(アジア開発銀行)には1973年夏に赴任し、5年弱勤務したのですが、前半は運輸部門のFinancial Analyst、後半はインドシナ3国担当Operation Officerでした。ADBローンはすべて政府向け、即ちソブリンローンで、担保を取らない代わりにプロジェクト審査はかなり厳格で、プロジェクト自体の審査は勿論、地域社会に与えるインパクト、国のカントリーリスクについても時間をかけて審査していました。当たり前とは言え、このことに強く共感したことを覚えています。苦い経験もしました。1976年にベトナム新政府の招きでダナンに行った時、突然高熱と下痢に見舞われてダウンし、ハノイに急送され「ペストの疑い」として野戦病院に3日3晩隔離されました。結局、疑いは晴れて無事マニラに帰宅できましたが、震える思いでした。

メキシコ駐在 【1980～1983】



メキシコ、デ・ラ・マドリッド大統領とのツーショット。サブソブリンローンが効いたか(1983年)。

マニラから帰国し2年余りでメキシコに赴任しました。当時メキシコは、大平総理自らが油乞いに単独訪問するほどの日の出の勢いある最重要国で、邦銀13行すべてが駐在員を派遣していました。当時メキシコでは電力、通信鉄道等のインフラ案件と、製鉄、化学工場等の重工業案件が目白押しでした。日本企業も大型プロジェクトの受注が続き(シカルツア製鉄所向けの連続鑄造設備(三井物産)、電気炉(日商岩井))、そのための資金供与を政府・輸銀に要請してきました。一方、マクロ経済は過剰投資を主因に財政、国際収支の継続的な赤字が懸念されていた矢先、81年末にまず有力民間企業が債務不履行を起こし、「まさか」と世界を驚かせたのですが、これが一挙に公的部門まで波及し、83年夏の公的債務不履行に繋がっていったのはご存知の通

りです。

メキシコ政府はこの状況に鑑み、メキシコの公的機関である PEMEX、NAFINSA 等に輸銀から直接融資するよう、サブソブリン借款を要請してきました。この問題は急遽訪墨した竹内輸銀総裁が、大学同期の松永大使とゴルフのプレー中に「松永への手土産だ」と決断されたとのこと。爾来、輸銀の貸し出しは飛躍的に増え、年間千億円を超える規模となりました。因みにその時のメキシコ大蔵省国際金融局次長は、現 OECD のアンヘル・グリア事務総長でした。彼とはその後 NY やワシントンでメキシコの債務問題を論じる仲となります。

ワシントン駐在 【1986～1990】

1986 年にワシントン駐在となりました。その頃日本は貯まり過ぎた外貨を国際社会に還元しようと、宮沢プランを始めました。フロリダ等いくつかの都市での新幹線構想、アーカンサス州の空港建設（クリントン知事と直接交渉した）、カリフォルニア州での治水設備等への直接融資がまじめに検討されました。同知事も来日され、輸銀にも来られましたが、結局実現しなかったのは残念でした。

ベルリンの壁が崩壊したのは 1989 年 11 月 9 日のことでしたが、その頃から東側諸国の世銀詣でが始まりました。資金不足に悩む世銀は日本との協調融資を多用することになり、輸銀にとっては、所謂ソブリンものに本格的に取り組むきっかけとなりました。当時世銀では YP (Young Professional) 出身の浅沼さん（現一橋大学客員教授）と阿部さん（早大名誉教授）が大活躍されていましたが、時間を惜しんでの仕事ぶりは「こんなに大変なのか」と思うほどでした。しかし、輸銀として世銀との交渉の折には、陰で色々アドバイスを頂いて大変助かりました。

輸銀営業 2 部長 【1991-1994】



旗を持っているのはウズベキスタンのアジモフ・ナショナルバンク総裁（後に副首相）（1994 年）。

ワシントンから帰って間もなく、欧州・アフリカ・中近東を担当する営業 2 部長となりました。冷戦終了後の世界では、新しい秩序を求めているいろいろな動きがある中で、輸銀にふさわしい案件を発掘すべく、多くの担当地域・国を訪問しました。中でも興味深かったのは中央アジアでしたが、希望する企業と共に中央アジア 3 国（カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン）を訪問しました。嬉しいことに、その後いくつかの案件が具体化しました。その他、

英国のヒースロー空港・ロンドン間の高速鉄道、南部アフリカ開発銀行、チェコ向け構造改革融資、ロシアの大陸横断通信プロジェクト等に直接融資を実現することができました。今にして思えば途方もなく大きな話ですが、当時は当たり前と思えたのは、やは

り日本が大きかった時代のせいでしょうか。

IDB 民間局長 【1995-1997】

輸銀を卒業して、IDB（米州開発銀行）の民間局局長に就任したのは1995年1月でした。その頃中南米ではインフラを中心に民営化の波が押し寄せていて、中南米向けではIFC（国際金融公社）が世銀以上に大繁盛でした。IDBもこの波に乗るべく、民間局を新設した訳です。しかしIDBの本業はやはり政府向け借款で、民間向けは軽視されていました。出張先の国でIDB事務所に行っても、民間向けの担当者がおらず、戸惑ったことが何回かありました。語学の面でも大変でした。IDBの公用語は西、蘭、仏、英の4か国語です。会議では議長が使用言語を決めるため、上席局長が議長の時には下端局長の私がお願いして英語にしてもらったことが度々ありました。当初は仕事を終えて家に帰ると、「チャンバラ映画」を見てやっと「落ち着いた」思いでした。何はともあれ3年間勤務し12件の承諾案件を置き土産に、後任の豊田さん（大蔵省）にバトンタッチして帰国しました。

振り返ってみるに、IDBでの仕事はやはり民間向けであり、数字で白黒がはっきりしていて、「べき論」の議論は必要なく、仕事がやり易かったというのが実感です。IDBでは職員の多くが各国の役人OBで、大臣経験者もごろごろいる世界。何と言いますか、南米上流社会の縮図といった感がありました。ある時、癌から復帰したテノール歌手ホセ・カレラスの復帰歓迎演奏会が、ワシントン駅を借り切って開催されましたが、これなどIDBならではのイベントだったと思います。

商社時代、そしてその研究所を設立・運営した時代 【1997-2003】

IDBから戻って商社の日商岩井に入りました。どんどんプロジェクトを作ってくれと誘われて、その気になって入ったのが1997年の11月。期せずして山一証券、北海道拓殖銀行が倒産しました。半年位顧問として待機している内に日商岩井自体がおかしくなり、経営改善対策本部長を命じられる羽目となりました。プロジェクトを作るのではなく、売ってくれ（資産縮小）、というわけです。その後経営が一段落し、日商岩井とニチメンの合併が決まった頃、日商岩井を一旦退社して別組織の研究所の設立・運営を依頼されました。商社に勤めてみての感



モンゴル・ドルノット県で毛刈り前の羊と

想は、作るにせよ、売るにせよ、商社ではタイミングと採算の感覚が最重要である、と改めて認識させられました。この感覚は「官」にはなかった。（株）日商岩井総合研究所を設立した際には、業務体制を調査部とコンサルタント部の2部制としました。前者は専ら本社のための経済調査を目標とし、後者の目標は「開発と環境保全に関するコン

サル業務」としました。まず取り組んだのは、日商岩井が強いベトナムでのシンク（植林等の吸収源）CDM（クリーン開発メカニズム）の獲得と国際市場での販売でした。JBICの支援の下、王子製紙と組んで、政府（環境省）から紹介された中部のいくつかの省でアカシアの植林計画を作成しましたが、残念ながら実施には至りませんでした。そんな中、外務省から委託調査「ODAを活用したPPPの国際的現状と我が国ODAへのPPP導入の可能性に関する基礎調査」の公募がありました。万全を期して応募したところ、幸運にも受注することができ、研究所の貴重な実績となりました。

また、研究所時代に外務省から第二次ODA戦略会議（議長：川口順子大臣）のメンバーに任命されました。4年間の在任中に3か国、モンゴル、ウズベキスタン・カザフスタン、ラオスでの国別援助計画作成ミッションに参加しました。中でもモンゴルは開国して10余年経っていましたが、何ら発展した形跡がみられませんでした。国内に製造業者は殆ど見当たらず、あるのは商店だけで、そこでの売り物は殆どが輸入した食料品、日用品、雑貨の類だけ。発展には中小製造業の育成が第一と思い、ツーステップローンの供与を提案しました。

2004-5年の2年間JICAの客員専門員になりました。この間は専らPPPの研究に従事して、専門家と職員の皆さんと協力して、2冊の調査レポートをまとめました。「PPPによるインフラ整備・運営事業に関するプロジェクト研究」（社会開発部）と「途上国の開発事業における官民パートナーシップ導入支援に関する基礎研究」（国際協力総合研修所）です。

コーエイ総合研究所 【2005～2018】

2005年4月から（株）コーエイ総合研究所に顧問として入社しました。爾来12年余りお世話になり、その間40件位のプロジェクトに関与しましたが、その殆どがPPPインフラ（主な国はフィリピン、インド、タイ、ベトナム等）、ツーステップローン、開発銀行、サブソブリンなど、すべてが開発金融に関するものでした。

中で最も長く、深く関与したのがモンゴルの中小企業育成・環境保全の為のツーステップローンです。第一次ローン（25億円）のSAPROF（案件形成促進調査）とその運営（モンゴル大蔵省発注）、第二次ローン（50億円）のSAPI（案件実施支援調査）とその運営（モンゴル大蔵省発注）、そして第三次ローンに先立っての2回目のSAPI。このSAPIは第三次ローンの供与に先立って、TSL（ツーステップローン）事業の出口戦略を問うものであり、その調査報告書は独立したSPE（Special Purpose Entity、官民連携の特別金融組織）の設立を提言するものでした。この提案はJICAの推奨の下、モンゴル政府が閣議了解しましたが、その後TSL管轄省がMOF（大蔵省）からMOFALI（農業軽工業省）に移り、その宿題が継承されているものと思われませんが、未だ実現を見ていません。

国際教養大学 【2009～2014】

2009年から5年間国際教養大学で教職についてのも得難い経験でした。これは旧知の市川博也さん(同大学教授、課程長)から誘われたもので、委嘱された講座は「BRICs」。早速持てる経験・知識を総動員してシラバスを作成し、本番に臨みました。授業ではロストウの「経済成長の諸段階」から紐解き、各国の経済状況、BRICsを提唱したGS(ゴールドマン・サックス)のオニール氏の論文、インフラPPP等々を議論しました。学生の受けもよく、結局講座数も増やして定年までの5年間お世話になりました。

学外授業では秋田市の水道局を尋ねて、水道の民営化について市職員と学生諸君とがディベートしたのも楽しい思い出です。また、モンゴル大蔵省の幹部を大学に招き、同国の経済発展につき学生と議論してもらったのも有意義であったと思います。教授稼業はモンゴル国立大学でも行い、3年間に亘り「モンゴルでの開発金融」と題する講座を持ちました。両大学での学生達との交流は今も続いていて大きな財産となっています。

モンゴルとの縁



モンゴル・セレンゲ県(唯一の林業・農業県)で(2006年)

モンゴルとのかかわりの中で、印象深いことが2つあります。1つは還暦を迎えた頃から大学の合唱仲間と始めた男声合唱団「パパス」が、モンゴルでウランバートル管弦楽団と協演してチャリティー演奏会を開いたことです(収益金は聾啞学校に寄贈)。もう一つは大統領から直々に「北極星勲章」という、同国では外国人に与えられる最高の勲章を受章したことです。

2018年7月にコーエイ総研を退職し、その後デロイトでもしばらく顧問をしていましたが、コロナの影響もあり、去る7月に完全リタイアしました。しかしモンゴルとのご縁は未だ切れず、FX(外国為替取引)プラットフォーム設立、太陽光発電プロジェクト、モンゴル養豚業等のプロジェクト形成のお手伝いで、広い意味での開発業務に未だ関わっている昨今です。

仕事上の苦勞と喜び

仕事上の喜びと言えば、外国政府相手に厳しい交渉の上やっと合意に至り、双方が歩み寄り肩を抱き合い握手するときに最高の喜びでしょう。そしてその喜びの大きさは交渉の厳しさ、難しさに比例すると思います。苦勞と言えば、交渉妥結に至るまでの苦勞が思い当たりますが、それは相手国からの合意を得る苦勞よりも、自分の属する組織・グループからの合意を得ることの方が苦勞が多かったように思います。更に皮肉なことに、先進国相手の交渉では自分の組織の合意は比較的易しかったのに反し、途上国相手では自分の組織の方が難しかった。本当は途上国相手の方が自分の組織の合意が得られ易い筈なのに。何となれば途上国に対しては(開発)支援であるのだから、自分達の方が鷹

揚に構えて、相手の良いようにしてあげればいいのと思うからです。

私の生き方

私は「国際化」という言葉とその意味するところが好きです。各国の国際化が世界のグローバル化を進め、世界平和に繋がると信じているからです。そして各国の発展はこの国際化によって齎せると。だから、はじめは日本の国際化のために働いていたつもりですが、いつの間にか気が付けば途上国の国際化のために働いていました。その境目が明確でないのは、輸銀がやっていた政策金融（例えば輸出金融）が、結果的に輸出国の日本と輸入国の両方のための（金融）支援となっていたからです。いずれにしても私は過去 60 年近く地球上のどこかの国（なんと 104 か国に仕事で行きました）の国際化、即ち開発・成長のために働いてきたこととなります。これこそが私の好きな生き方なのだと気付いて、いま改めてその幸せを感じています。